

石川啄木研究資料稿

——歌稿ノート『一握の砂以後

(四十二年十一月末より)』と投稿歌(下)——

岡崎和夫

はじめに

小稿は、「紀要」前号(第三十六号)にかかげた右標題の資料稿(上)に続くものである。七十一首めから歌稿ノート末尾の一九三首めまで都合一二三首についての調査であり、形式の一切は前号と同じである。

生来杜撰な筆者にとって、こうした地道な作業はいかにも耐えがたいものであったが、これを通して、句説法の使用原理とも言うべきものをはじめとして従来見過ごされて来た啄木の短歌表現のうえの問題をいくつか見据えることができた。

筆者がしばしば思うのは、啄木についての研究が汗牛充棟といった様を呈しているにもかかわらず、表現についてのそれがあまりにも手薄なことである。たとえば、筆者が、かつて非力をも顧みず桂孝二氏の一連の啄木研究に統こうとして試みた「石川啄木の短歌表現——その口語性の問題——」(「解釈」昭和五十七年八月号)もそういう心から出たものであったし、いまとりかかっている字余りや破型のことも、また初句・結句の類型のことも、表現の

うえのこととして、いわば晩年の啄木の示した理論と実践とが、現代の短歌のかかえるべき問題としても尚あたらしいと考えるからなのである。いかにも突飛にきこえるかも知れないが、たとえば、塚本邦雄の試みた短歌現代化の方向と、こんな古くに示された啄木の方向とは、その表現開拓のありかたにおいて、矛盾するどころか、意外に近い一面を持つ。この稿は、以下の調査についてだけでも規定の紙幅をかなり超過してしまうことを特別にお許し願ったのでこれ以上詳しくふれることはできないが、筆者のこうした見解については、不十分ながら、たとえば、近刊の拙稿「塚本短歌の構造——新しい調べの振幅——」（『国文学・解釈と鑑賞』）（国文学・昭和五十九年二月号）「塚本邦雄の世界」所収）などについて見られたい。

◎〈朱〉

古新聞！

71 土主衍なれど、

おやここにおれの歌の事を

自分の歌の事を賞めて書いてあり

古新聞かな。二三行なれど。

古新聞！

おや、此処におれの歌のことを賞めて書いてあり

——二三行なれど。

（『早稲田文学』明44・3月号）

古新聞！

おや、此処に俺の歌のことを賞めて書いてあり

——二三行なれど。

（『コスモス』明44・2月号）

○

72 引越しの朝に足もとに落ちてゐぬ、

女の写真！

忘れぬし写真！

○
73 その頃は氣もつかざりし

假名ちがひの多きことかな、
昔の恋文！

◎〈朱〉

74 八年前の

今のわが妻の手紙の束、
何處に藏しまひしかと氣にかかるかな。

○

75 眠られぬ癖のかなしさよ！

すこしでも

眠氣がさせば、うろたへて寝る。

○

76 笑ふにも笑はれざりき――

長いこと搜したナイフの
手の中にありしに。

八年前の

今のわが妻の手紙の束、
何處に藏しまひしかと氣にかかるかな。

77

◎〈朱〉

この四五年
空を仰ぐといふことが一度もなかりき。
かうもなるものか？

〔コスモス〕明44・2月号

78

◎〈朱〉

原稿紙にでなくては
字を書かぬものと、
かたく信ずる我が児のあどけなさ！

原稿紙にでなくては
字を書かぬものと、
かたく信ずるわが児のあどけなさ

〔早稲田文学〕明44・3月号

79

◎〈朱〉

どうか、かうか、今月も無事に暮らしたりと、
外に欲もなき
晦日の晩かな。

どうか、かうか、今月も無事に暮らしたりと、
外に欲もなき
晦日の晩かな。

〔コスモス〕明44・2月号

80

◎〈朱〉

あの頃はよく嘘を言ひき。
平気にてよく嘘を言ひき。
汗が出づるかな。

あの頃はよく嘘を言ひき。
平気にてよく嘘を言ひき。
汗が出づるかな。

〔コスモス〕明44・2月号、
「早稲田文学」
明44・3月号

〔早稲田文学〕明44・3月号

81 古手紙よ！

○
あの男とも、五年前は、
かほど親しく交はりしかな。

○ 〈全集〉

82 名は何と言ひけむ。

姓は鈴木なりき。

今はどうして何處にゐるらむ。

83 生れたといふ葉書みて、

○
ひとしきり、

顔をはれやかにして煙草のむ。 ゐたるかな。

84 そうれみろ、

○
あの人も子をこしらへたと、
何か氣の済む心地にて寐る。

名は何といひけむ。

姓は鈴木なりき。

今はどうして何處にゐるらむ。

〔『コスモス』明44・2月号〕

名は何と言ひけむ、

姓は鈴木なりき。

今はどうして何處にゐるらむ。

〔『早稲田文学』明44・3月号〕

◎〈朱〉

85 「石川はふびんな奴だ。」
ときにかう自分で言ひて
かなしみてみる。

◎〈朱〉

86 ドア推してひと足出れば、
病人の目にはてもなき
長廊下かな。

◎〈朱〉

87 重い荷を下したやうな
気持なりき、
この寐台^{の上}に来ていねしとき。

◎〈朱〉

88 そんならば生命が欲しくないのかと、
医者に言はれて、
だまりし心！

「石川はふびんな奴だ！」

時にかう自分で言ひて、
かなしみて見る。

〔コスモス〕明44・2月号、『早稲田文学』明
44・3月号

ドア推して、ひと足出れば、
病人の目にはてもなき
長廊下かな。

〔曠野〕明44・3月号、『さらば』明44・7月号

ドア推してひと足出れば、
病人の目にはてもなき
長廊下かな。

〔文章世界〕明44・3月号

重い荷を下したやうな
気持なりき、
この寝台^{の上}に来て寝たる時。

〔文章世界〕明44・3月号

そんならば生命が惜しくないのかと、
医者に言はれて、
だまりし心！

〔文章世界〕明44・3月号

◎〈朱〉

89 真夜中にふと目がさめて

わけもなく泣きたくなりて

蒲団をかぶれる。

◎〈朱〉

90 話しかけて返事のなきに

よくみれば

泣いてゐたりき、隣りの患者。

◎〈朱〉

91 病院の窓にもたれて、

久しぶりに巡査を見たりと

よろこべるかな。

◎〈朱〉

92 晴れし日のかなしみの一つ！

病室の窓にもたれて

煙草を味ふ。

真夜中にふと目がさめて、
わけもなく泣きたくなりて、
蒲団をかぶれる。

〔曠野〕明44・3月号、『文章世界』明44・3月号

話しかけて、返事のなきに、

よく見れば、

泣いてゐたりき、隣りの患者。

〔曠野〕明44・3月号

話しかけて返事のなきに、

よく見れば、

泣いてゐたりき、隣りの患者。

〔文章世界〕明44・3月号

病室の窓にもたれて、

久しぶりに巡査を見たりと

よろこべるかな。

〔曠野〕明44・3月号、『文章世界』明44・3月号

晴れし日のかなしみの一つ！

病院の窓にもたれて、

煙草を味ふ。

〔曠野〕明44・3月号

暗れし日のかなしみの一つ！

病室の窓にもたれて

煙草を味ふ。

〔文章世界〕明44・3月号

①〈朱〉

93

夜おそく何處^{どこ}やらの室の騒^{さわ}がしきは
人や死^しにたらむと、
息をひそむる。

〔文章世界〕明44・3月号

②〈朱〉

94

いづも、いづもゆめたき手^てとす
脈をとる看護婦の手^のをあたたかき日あり
今朝も見ゆめし。
つめたく堅き日もあり

脈をとる看護婦の手の
あたたかき日あり、
つめたく堅き日もあり。

〔創作〕明44・3月号、『文章世界』明44・3月号

脈をとる看護婦の手の
あたたかき日あり、
つめたく、堅き日もあり。

〔曠野〕明44・3月号、『さらば』明44・7月号

③〈朱〉

95

病院に入りて初めての長い夜^{といふに}を
すぐ寐入りしが、
物足らぬかな。

病院に入りて初めての夜といふに、
すぐ寐入りしが
もの足らぬかな。

〔曠野〕明44・3月号、『さらば』明44・3月号

病院に入りて初めての夜といふに、
すぐ寐入りしが

物足らぬかな。

〔文章世界〕明44・3月号

④〈朱〉

96

何となく自分をえらい人のやうに
思ひてゐしも、たりき。
ずっと昔かな。子供なりしかな。

何となく自分をえらい人のやうに
思ひてゐたりき。
子供なりしかな。

〔早稲田文学〕明44・3月号

97 ふくれたる腹を撫でつつ、

病院の寢台に、ひとり、

かなしめるかな。みてあり。

○

98 目さませば、からだ痛くて

動かれず。

泣きたくなりて夜明くるを待つ。

○

99 びつしよりと盗汗出てる

あけがたの

まだ覚めやらぬ重きかなしみ。

○

ふくれたる腹を撫でつつ、

病院の寢台に、ひとり、

かなしめるかな。

〔創作〕明44・3月号

ふくれたる腹を撫でつつ、

病院の寢台に、ひとり、

かなしみてあり。

〔曠野〕明44・3月号、〔さらば〕明44・3月号

目さませば、からだ痛くて

動かれず。

泣きたくなりて夜明くるを待つ。

〔創作〕明44・3月号、〔曠野〕明44・3月号、〔さらば〕明44・7月号

びつしよりと盗汗出てる

あけがたの

まだ覚めやらぬ重きかなしみ！

〔創作〕明44・3月号

○

100 ぼんやりとした悲しみが、

夜となれば、

寢台の上にそつと来て乗る。

ぼんやりとした悲しみが、

夜となれば、

寢台の上にそつと来て乗る

〔創作〕明44・3月号、『さらば』明44・7月号

ぼんやりとした悲しみが、

夜となれば、

寢台の上にそつと来て乗る。

〔曠野〕明44・3月号

ぼんやりとした悲しみが

夜となれば

寢台の上にそつと来て乗る

〔血潮〕明44・9月号

○
101 病院の窓によりつつ、

いろいろの人の

元気に歩くを眺む*

○
102 もうお前の心底をよく見届けたと、

夢に母来て

泣いてゆきしかな。

○
103 思ふこと盗みきかるる如くにて、

つと胸を引きぬ――

聴診器より。

○
104 看護婦が徹夜するまで、

わが病ひ、

わるくなれともひそかに願へる***。

病院の窓によりつつ、

いろいろの人の

元氣よく歩くを眺む

（『創作』明44・3月号）
もうお前の心底をよく見届けたと、

夢に母来て、

泣いて行きしかな。

（『創作』明44・3月号）
思ふこと盗み聞かるる如くにて、

つと胸を引きぬ――

聴診器より。

（『創作』明44・3月号）
思ふことを盗み聞かるる如くにて、

つと胸を引きぬ――

聴診器より。

（『曠野』明44・3月号、『さらば』明44・7月号）
思ふことを盗み聞かるる如くにて

つと胸を引きぬ

聴診器より――

（『血潮』明44・9月号）

看護婦が徹夜するまで、

わが病ひ、

わるくなれともひそかに願へる。

（『創作』明44・3月号、『曠野』明44・3月号、『さらば』明44・7月号）

105 病院に来て、

妻や子をいつくしむ

まことの我にかへりけるかな。

○

106 もう嘘をいはじと思ひき――

それは今朝――

今また一つ嘘をいへるかな。

○

107 何となく、

自分を嘘のかたまりの如く思ひて、

目をばつぶれる。

○

108 今までのことを

みな嘘にしてみれど、

心すこしも慰まざりき。

病院に来て、

妻や子をいつくしむ

まことの我にかへりけるかな。

〔創作〕 明44・3月号

もう嘘を言はじと思ひき――

それは今朝――

今また一つ嘘を言へるかな。

〔創作〕 明44・3月号

何となく、

自分を嘘のかたまりの如く思ひて、

目をばつぶれる。

〔創作〕 明44・3月号

今までの事を

みな嘘にして見れど、

心すこしも慰まざりき。

〔創作〕 明44・3月号

109 軍人になると言ひ出して、

父母に

苦勞させたる昔の我かな。

軍人になると言ひ出して、

父母に

苦勞させたる昔の我かな。

110 うつとりとなりて、

劍をさげ、馬にのれる己が姿を
胸に描ける。

うつとりとなりて、

劍をさげ、馬に乗れる己が姿を
胸に描ける。

111 藤沢といふ代議士を

弟のごとく思ひて、
泣いてやりしかな。

藤沢といふ代議士を

弟のごとく思ひて、
泣いてやりしかな。

112 何か一つ

大いなる悪事しておいて、
知らぬ顔してゐたき氣持かな。

何か一つ大いなる悪事しておいて、

知らぬ顔してゐたき氣持かな。

①〈青〉

113 ちつとして寐ていらつしやいと
子供にでもいふがごとくに
医者はいふ日かな。

②〈青〉

114 氷囊の下より
「まなこを光らせて、
」寐られぬ夜は人をにくめる。

③〈青〉

115 春の雪みだれて降るを
熱のある目に
かなしくも眺め入りたる。

④〈青〉

116 人間のその最大のかなしみが
これかと
ふつと目をばつぶれる。

ちつとして寝ていらつしやいと、

子供にでも云ふが如くに、

医者はいふ日かな。

〔精神修養〕明44・4月号

ちつとして寝ていらつしやいと、

子供にでも言ふがごとくに、

医者と言ふ日かな。

〔新日本〕明44・7月号

氷囊の下より眼光らせて、

寝られぬ夜は

人を憎める。

〔精神修養〕明44・4月号

春の雪みだれて降るを、

熱のある目に

かなしくも眺め入りたる。

〔精神修養〕明44・4月号

人間のその最大のかなしみが

これかと、

ふつと目をばつぶれる。

〔精神修養〕明44・4月号

眼をもち下 痛みある胸に手をおきて

胸の痛みをちつとこらへる。すある申かたく眼をとづ。

⑤膏

118 医者の顔色をちつと見し外に

何も見ざりき

胸の痛む日の午後。み暮る日。

◎青

119 病みてあれば心も弱るらむ！

のまゝの

泣きたきことが胸にあつまる。

● 異

120 寐つつ読む本の重さに

つかれたる

手を休めては、物を思へり。

回診の医者の遅さよ！

痛みある胸に手をおきて、

かたく眼を閉づ。

『新日本』明44・7月号

医者の顔色をちつと見し外に、

何も見ざりき——

胸の痛み募る日。

『新日本』明44・7月号

病みてあれば心も弱るらむ！

何となく

泣きたきことの數ある日かな。

〔精神修養〕 明44・4月号

寝つつ読む本の重さに

つかれたる、

手を休めては、物を思へり。

『新日本』明44・7月号

① 〈黒〉

121 今日は、なぜか、

二度も、三度も、

金側の時計を一つ欲しと思へり。

② 〈黒〉

122 いつか、是非、出さんと思ふ本のこと、

表紙のことなど

案じくわせる。妻に語れる。

③ 〈黒〉

123 胸いたみ、

春の雲の降る日なり。

薬に噎せて伏して眼をとつ。

④ 〈黒〉

124 あたらしきサラダの色の

うれしさに

箸とりあげて見は見つれども――

胸いたみ、

春のみぞれの降る日なり。

薬に噎せて、伏して眼を閉づ。

(『新日本』明44・7月号)

あたらしきサラダの色の

うれしさに、

箸とりあげて見は見つれども――

(『新日本』明44・7月号)

◎〈黒〉

125 子を叱る、あはれ、この心よ。

熱高き日の癖とのみ

妻よ、思ふな。

◎〈青〉

126 運命の来て乗れるかと

うたがひぬ――

蒲団の重き夜半の寐覺めに。

◎〈青〉

127 たへがたき渴き覺ゆれど、

手をのべて

林檎とるだにもうき日かな。

◎〈青〉

128 氷囊のとけて温めば、

おのづから目がさめ来り、

からだ痛める。

子を叱る、あはれ、この心よ。

熱高き日の癖とのみ、

妻よ、思ふな。

〔新日本〕明44・7月号〕

かなしみの来て乗れるかと

うたがひぬ――

蒲団の重き夜半の寢覺めに。

〔精神修養〕明44・4月号〕

たへがたき渴きおぼゆれど、

手をのべて、

林檎とるだに物憂き日かな。

〔精神修養〕明44・4月号〕

氷囊ひょうなうの融とけて温ぬるめば、

おのづから目がさめ来り、

身体痛めり。

〔精神修養〕明44・4月号〕

◎ 黒 ◆

129 いま、夢に閑古鳥を聞けり。

閑古鳥を忘れざりしが

かなしまよかな。くあるかな。

○

130 ふるさと思ふじと出でて五年、

おもふものの十や病をえて、

かの閑古鳥を夢に見たるかな

きけ

○

131 閑古鳥！

遊民村の山莊をめぐる林の

あかつきなつかし。

○

132 ふるさとの寺の畔の

ひばの木

いだだきに來て啼きし閑古鳥

いま、夢に閑古鳥を聞けり。

閑古鳥を忘れざりしが

かなしくあるかな

〔新日本〕明44・7月号

ふるさを出でて五年、

病を得て、

かの閑古鳥を夢に聞けるかな。

〔新日本〕明44・1月号

ふるさとの寺の畔の

檜葉ひばの木

いだだきに來て啼きし閑古鳥！

〔新日本〕明44・7月号

133 脈をとる手のふるいこそ

○
かなしけれ――

医者に叱られし若き看護婦！

134 いつとなく、記憶に残りぬ――

○
Fといふ看護婦の手の

つめたさなども。

135 はづれまで一度ゆきたしと

○
思ひゐし

かの病院の長廊下かな。

136 起きてみて、

○
また直ぐ寐たくなる時の

力なき眼に愛でしチュリップ！

脈をとる手のふるいこそ

○
かなしけれ――

医者に叱られし若き看護婦！

134 いつとなく、記憶に残りぬ――

○
F――といふ看護婦の手の

冷たさなども。

135 はづれまで一度ゆきたしと

○
思ひゐし、

かの病院の長廊下かな

136 起きてみて、

○
また直ぐ寝たくなる時の

力なき眼に愛でしチュリップ！

〔新日本〕明44・7月号

〔新日本〕明44・7月号

〔新日本〕明44・7月号

137 堅く握るだけの力も無くなりし

やせし我が手の

いとほしさかな。

堅く握るだけの力も無くなりし、

瘦せし我が手の

いとほしさかな。

〔新日本〕明44・7月号

138 わが病の

その因るところ深く且つ遠きを思ふ。

目をとちて思ふ。

わが病の

その因る所深く且つ遠きを思ふ。

眼を閉ちて思ふ。

〔新日本〕明44・7月号

139 かなしくも、

病いゆるを願はざる心我に在り。

何の心ぞ。

かなしくも、

病癒ゆるを願はざる心我に在り。

何の心ぞ。

〔新日本〕明44・7月号

140 新しきからだを欲しと思ひけり、

手術の傷の

痕を撫でつつ。

新らしき身体を欲しと思ひけり、

手術の傷の

痕を撫でつつ。

〔新日本〕明44・7月号

141 薬のむことを忘るるを、

それとなく、

たのしみにする思ふ長病かな。

薬のむことを忘るるを、

それとなく、

たのしみに思ふ長病かな。

142 ボロオデンといふ露西亜名が、

何故ともなく、

幾度も思ひ出さるる日なり。

143 いつとなく我にあゆみ寄り、

手を握り、

またいつとなく去りゆく人々！

いつとなく我に歩み寄り、

手を握り、

またいつとなく去り行く人々！

144 友も、妻も、かなしと思ふらし——

病みても猶、

革命のこと口に絶たねば。

友も、妻も、悲しと思ふらし——

病みても猶、

革命のこと口に絶たねば。

〔新日本〕明44・7月号

〔新日本〕明44・7月号

〔新日本〕明44・7月号

○ 145 やや遠きものに思ひし

テロリストの悲しき心も――

近づく日のあり。

やや遠きものに思ひし、
テロリストの悲しき心も――

近づく日あり。

(『新日本』明44・7月号)

○ 146 かかる目に

すでに幾度會へることぞ！

成るがままに成れと今は思ふなり。

かかる目に

すでに幾度會へることぞ！

成るがままに成れと今は思ふなり。

(『新日本』明44・7月号)

○ 147 月に三十円もあれば、田舎にては

楽に暮らせると――

ひよつと思へる。

○

148 今日もまた胸に痛みあり。

死ぬならば

ふるさとに行きて死なむと思ふ。

今日もまた胸に痛みあり。

死ぬならば、

ふるさとに行きて死なむと思ふ。

(『新日本』明44・7月号)

149 いっしかに夏となれりけり。

やみあがりの目にこころよき
雨の明るさ！

150 病みて四月——

そのときどきに変りたる
くすりの味もなつかしきかな。

151 病みて四月——

その間にも、猶、目に見えて、
わが子の背丈のびしかなしみ。

152 すこやかに、

背丈のびゆく子を見つつ、
われの日毎にさびしきは何ぞ。

いっしかに夏となれりけり——

病みあがりの眼にこころよき
雨の明るさ！

病みて四月——

そのときどきに変りたる
薬の味もなつかしきかな。

病みて四月——

その間にも、猶、目に見えて、
わが子の背丈のびしかなしみ。

すこやかに、

背丈のびゆく子を見つつ、
われの日毎にさびしきは何ぞ。

〔新日本〕明44・7月号〕

〔新日本〕明44・7月号〕

〔文章世界〕明44・7月号〕

〔文章世界〕明44・7月号〕

153 まくら辺に子を坐らせて、

まじまじとその顔を見れば、

逃げてゆきしかな。

○

154 いつも、子を

うるさきものと思ひゐし間に、

その子、五歳になれり。

○

155 その親にも、

親の親にも似るなかれ——

かく汝が父は思へるぞ、子よ。

○

156 かなしきは、

(われもしかりき)

叱れども、打てども泣かぬ児の心なる。

まくら辺に子を坐らせて、

まじ／＼とその顔を見れば、

逃げてゆきしかな。

(『文章世界』明44・7月号)

いつも、子を

うるさきものと思ひゐしあひだに

その子、五歳^{いっ}になれり。

(『文章世界』明44・7月号)

その親にも、

親の親にも似るなかれ——

かく汝が父は思へるぞ、子よ。

(『文章世界』明44・7月号)

かなしきは

(われもしかりき)

叱れども、打てども泣かぬ子の心なる。

(『文章世界』明44・7月号)

157 「労働者」「革命」などといふ言葉を

聞きおぼえたる

五歳の子かな。

158 時として、

あらん限りの声を出し、

唱歌をうたふ子をほめてみる。

159 何思ひけむ――

玩具をすてて、おとなしく、

わが側に來て子の坐りたる。

160 お菓子貰ふ時も忘れて、

二階より

町の往來を眺むる子かな。

「労働者」「革命」などといふ言葉を

聞きおぼえたる

五歳の子かな。

時として、

あらん限りの声を出し、

唱歌をうたふ子を賞めて見る。

何思ひけむ――

玩具を捨て、おとなしく、

わが側に來て子の坐りたる。

お菓子貰ふ時も忘れて、

二階より、

町の往來を眺むる子かな。

(『文章世界』明44・7月号)

(『文章世界』明44・7月号)

(『文章世界』明44・7月号)

(『文章世界』明44・7月号)

161 新しきインクの匂ひ、

目に沁むもかなしや。

いつか庭の青めり。

○

162 ひとところ、疊を見つめてありし間の

その思ひを、

妻よ、語れといふか。

○

163 あの年のゆく春のころ、

眼をやみてかけし黒眼鏡、――

こはしやしにけむ。

○

164 薬のむことを忘れて、

ひさしぶりに、

母に叱られしをうれしと思へる。

あたらしきインクの匂ひ、

目に沁むもかなしや――

夏の雨の明るさ。

〔層雲〕明44・7月号

ひと処、疊を見つめてありし間の

その思ひを、

妻よ、語れといふや。

〔層雲〕明44・7月号

あの年のゆく春のころ、

眼を病みて懸けし黒眼鏡――

壊しやしにけむ。

〔層雲〕明44・7月号

薬のむことを忘れて、

ひさしぶりに、

母に叱られしをうれしと思へる。

〔層雲〕明44・7月号

○ 165 枕辺の障子あけさせて、

空を見る癖もつけるかな、――

長き病に。

枕辺の障子開けさせて、

空を見る癖もつけるかな――

長き病に。

〔層雲〕明44・7月号

○ 166 おとなしき家畜のごとき

心となる、

熱やや高き日のたよりなさ。

おとなしき家畜のごとき

心となる、

熱やや高き日のたよりなさ。

〔層雲〕明44・7月号

○ 167 何か、かう、書いてみたくなりて、

ペンを取りぬ――

花活の花あたらしき朝。

何か、かう、書いてみたくなりて、

ペンを取りぬ――

花活の花あたらしき朝。

〔層雲〕明44・7月号

○ 168 放たれし女のごとく、

わが妻の振舞ふ日なり。

ダリヤを見入る。

放たれし女のごとく、

わが妻の振舞ふ日なり。

ダリヤを見入る。

○
169 あてのなき金などを待つ思ひかな。

寝つ、起きつして、

今日も暮せり。^わしたり。

○
170 何もかもいやになりゆく

この気持よ。

思ひ出しては煙草を吸ふなり。

○
171 或る市にゐし頃の事として、

友の語る

恋がたりに嘘の交るかなしさ。

○
172 ひさしぶりに、

ふと声を出して笑ひてみぬ――

蠅の両手を揉むが可笑しさに。

或る市にゐし頃の事として、

友の語る、

恋がたりに嘘の交るかなしさ。

ひさしぶりに、

ふと声を出して笑ひてみぬ――

蠅の両手を揉むが可笑しさに。

〔層雲〕明44・7月号

〔層雲〕明44・7月号

173 胸いたむ日のかなしみも、

かをりよき煙草の如く、

棄てがたきかな。

174 何か一つ騒ぎを起してみたかりし、

先刻の我を

いとしと思へる。

175 五歳になる子に、何故ともなく、

ソニヤといふ露西亞名をつけて、

呼びてはよろこぶ。

何か一つ騒ぎを起こしてみたかりし、

先刻の我を

いとしと思へる。

五歳になる子に、何故ともなく、

ソニヤといふ露西亞名をつけて、

呼びてはよろこぶ。

〔層雲〕 明44・7月号

〔層雲〕 明44・7月号

八月****

176 解けがたき

不和のあひだに身を處して、

ひとりかなしく今日も怒れり。

○

177 猫を飼はば、

その猫が ***** また争ひの種となるらむ。

かなしき我が家。

○

178 俺ひとり下宿屋にやりてくれぬかと、

今日もあやふく、

いひ出でしかな。

179 ある日、ふと、やまひを忘れ、

牛の啼く真似をしてみぬ——

妻子の留守に。

解けがたき、

不和のあひだに身を處して、

ひとりかなしく今日も怒れり。

〔詩歌〕明・44 9月号

猫を飼はば、

その猫がまた争ひの種となるらむ。

かなしきわが家。

〔詩歌〕明 44・9月号

俺ひとり下宿屋にやりてくれぬかと、

今日も、あやふく、

言ひ出でしかな。

〔詩歌〕明 44・9月号

ある日、不図、やまひを忘れ、

牛の啼く真似をしてみぬ——

妻子の留守に。

〔詩歌〕明 44・9月号

180 かなしきは我が父！

○
今日も新聞を読みあきて、
庭に小蟻とあそべり。

かなしきはわが父！

○
今日も新聞を読み飽きて、
庭に小蟻と遊べり。

〔詩歌〕明44・9月号

181 たゞ一人の

○
をとこの子なる我はかく育てり。
父母もかなしかるらむ。

ただ一人の
をとこの子なる我はかく育てり。
父母も悲しかるらむ。

〔詩歌〕明44・9月号

182 茶まで断ちて、

○
わが平復を祈りたまふ
母の今日また何か怒れる。

茶まで断ちて、

わが平復を祈りたまふ
母の今日また何か怒れる。

〔詩歌〕明44・9月号

183 今日ひよつと近所の子等と遊びたくなり、

○
呼べど来らず。

こころむづかし。

今日ひよつと近処の子等と遊びたくなり
呼べど来らず。

心むづかし。

〔詩歌〕明44・9月号

184 やまひ癒えず、

死なず、

日毎にこゝろのみ險しくなれる七八月かな。

やまひ癒えず、

死なず、

日毎に心のみ險しくなれる七八月なつかな。

〔詩歌〕明44・9月号

185 買ひおきし

薬つきたる朝に來し

友のなさけの爲替のかなしさ。

買ひおきし、

薬尽きたる朝に來し、

友のなさけの爲替のかなしさ。

〔詩歌〕明44・9月号

186 児を叱れば、

泣いて、寐入りぬ。

口すこしあけし寐顔にさはりてみるかな。

児を叱れば、

泣いて、寐入りぬ。

口すこしあけし寐顔に触りてみるかな。

〔詩歌〕明44・9月号

187 何がなしに

肺が小さくなれる如く思ひて起きぬ――

何がなしに、

肺が小さくなれる如く思ひて起きぬ――

秋近き朝。

秋近き朝。

〔詩歌〕明44・9月号

188 秋近し！

電燈の球のぬくもりの
さはれば指の皮膚に親しき。

秋近し！

電燈の球のぬくもりの
触れば指の皮膚に親しき。

〔詩歌〕明44・9月号

189 ひる寐せし児の枕辺に

人形を買ひ来てかざり、
ひとり楽しむ。

昼寐せし児の枕辺に、

人形を買ひ来て飾り、
ひとり楽しむ。

〔詩歌〕明44・9月号

190 クリストを人なりといへば、

妹の眼が、かなしくも、
われをあはれむ。

基督を人なりと言へば、

いもうとの眼が、かなしくも、
我をあはれむ。

〔詩歌〕明44・9月号

191 椽先にまくら出させて、

ひさしぶりに、
ゆふべの空にしめるかな。

椽先に枕出させて、

ひさしぶりに、
ゆふべの空に親しめるかな。

〔詩歌〕明44・9月号

192 庭のそとを白き大ゆけり。

ふりむきて、

犬を飼はむと妻にはかれる。

庭のそとを白き大ゆけり。

ふり向きて、

犬を飼はむと妻にはかれる。

(『詩歌』明44・9月号)

193 大跨に椽側を歩けば、

(注)

＊「を」の下に「の」と思われる仮名あり。

＊「底」の下に「氣」と思われる字の四画目はとまであり。

＊「願」の下に「思」の二画目まで記した跡あり。

＊抹消跡、明瞭には見えないが「は」らしい。

＊この部分からあとは変体仮名で記されている。

＊「が」の下に「も」と思われる仮名あり